論文

# 森鷗外『魚玄機』論

丁　若思

## はじめに

『魚玄機』は大正四(一九一五)年七月一五日、『中央公論』第三〇年第八号に発表された森鷗外、九番目の歴史小説である。この作品は、中国晩唐の女流詩人、魚玄機の詩話を題材としている。美貌と詩の才能に恵まれた主人公、魚玄機は李億の妾となり、その正夫人に追い出されて咸宜観(道教寺院の名前)に入り、女道士になる。道観で魚玄機は楽人陳某と男女の関係となるが、ある日、陳と自分の召使い婢緑翹との関係を疑い、緑翹を殺してしまう。結果、魚玄機は投獄され、死刑に処せられてしまう。

この作品を執筆するにあたって鷗外が参照した史料については、作品末尾に次のように記されている。(1)

三水小牘　南部新書
太平広記　北夢瑣言
続談助　唐才子傳
唐詩紀事　全唐詩(姓名下小傳)
全唐詩話　唐女郎魚玄機詩(2)

これらの史料の内、本論文では、魚玄機の生涯を詳細に記録する史料系統『三水小牘』『北夢瑣言』『唐才子傳』を中心にすえて比較検証を進めていくつもりである。『三水小牘』の作者、皇甫枚は魚玄機とほぼ同時代の人物であり、玄機に関する記述としては、信憑性は高い。また、『北夢瑣言』は宋の時代に成立されており、他の史料より成立時間が早い。このような成立事情を踏まえ、本論文では、これらの史料に記された魚玄機像と鷗外が描いた魚玄機像と比較しつつ、鷗外による改作の意図を明らかにしていく。

## 一　魚玄機の人物像

まずは史伝と比較しつつ、鷗外が魚玄機の生い立ちをどのように描いたのか、分析していく。

作品には、魚玄機の生家について「玄機が長安人士の間に知られてゐたのは、獨り美人として知られてゐたのみではない。此女は詩を善よくした。」「魚玄機の生れた家は、長安の大道から横に曲がつて行く小さい街にあつた。所謂狹邪の地でどの家にも歌女を養つてゐる。魚家も其倡家の一つである」と記されている。魚玄機は長安の「狹邪の地」にある娼家の娘として生まれた。美貌の持ち主で、卓越した詩の才能の持ち主だったと、作品では語られている。

一方、史料にはどのように伝えられているか。魚玄機の生涯は、皇甫枚『三水小牘』に収められている「魚玄機笞斃綠翹致戮」（筆者訳「魚玄機が鞭で綠翹を打ち、彼女は死に至った」）[3]と題する文に詳しく語られている。

西京咸宜觀女道士魚玄機。字幼微。長安倡家女也。色既傾國。思乃入神。喜讀書屬文，尤致意於一吟一詠。（筆者訳「長安の西にある咸宜観の女道士魚玄機。字は幼微。長安の娼家生まれた女。顔は王の心をまどわし、国を滅ぼしてしまうほどに美しく、思想も他に比類ないほどに高貴である。読書や作文が好きで、とくに詩歌を朗唱し、作ることに集中する」）

このように『三水小牘』においても、鷗外の『魚玄機』と同様に、彼女の美貌や詩才について言及されている。また、他の史料の内、『北夢瑣言』[4]には「唐女道魚玄機，字蕙蘭，甚有才思。」（筆者訳「唐の女道士魚玄機、字は蕙兰、詩を作る才能がある。」）という記述が、『唐才子伝』[5]には「玄機。長安人。女道士也。性聰慧。好讀書。尤工韻調。情致繁縟。」（筆者訳「玄機、長安人、女道士である。利発で、読書が好きである。とくに詩を作るのが好きで、詩文の感情が豊かで辞句がきらびやかである」）という記述が見られる。いずれの史料にも魚玄機の才能や美貌への言及を確認することができる。

鷗外は、これらの史料の中から玄機の出身や才能に関する記述をまとめ、魚玄機を形象しており、とくに『三水小牘』を参照していることを確認できる。魚玄機が娼家出身であることを記しているのは、『三水小牘』のみである。

ところで、唐の時代には、たくさんの歌女がいた。文人、官僚や貴公子たちは、しばしば「狹邪の地」、つまり娼家に通ったが、彼らは娼家において官能的な享楽以外に、高いレベルの教養も求めるのが一般的であった[6]。それゆえ、当時の文化的雰囲気に適応する必要から、娼家出身の魚玄機も、詩歌の朗唱、創作の技などの文化的素養が必要とされ、幼少期から教育を受ける機会を得ることができたのである。

一方、小説の冒頭近くには、詩歌の開花期である唐時代の文化的環境について「詩が唐の代に最も隆盛であつたことは言を待たない。隴西の李白、襄陽の杜甫が出て、天下の能事を盡した後に太原の白居易

が踵いで起つて、古今の人情を曲盡し、長恨歌や琵琶行は戸ごとに誦ぜられた」と記されている。唐代における詩歌の隆盛という歴史的状況を背景に、唐の娼妓が文人らの好みに合うよう詩や歌、踊りの技をみがくようになった当時の社会的風潮が、ここには記されている。

しかし、その一方で作品中には、「玄機が詩を學びたいと言い出した時、両親が快く諾して、隣街の窮措大を家に招いて、平仄や押韻の法を教へさせたのは、他日此子を揺金樹にしようと云ふ願があつたからである」という記述が見られる。鷗外は魚玄機が詩歌への興味を抱いた理由を、娼家文化の中で育ったからではなく、彼女の内発的な動機あるいは自我の欲求に基づくものであったからだと説明しているわけである。(7)

## 二　李億との婚姻

続いて玄機と李億の恋愛生活について、作品と史料を比較しつつ、分析していく。『魚玄機』執筆にあたって、鷗外が参照にした『北夢瑣言』(8)『唐才子伝』(9)には次のような記述が見られる。

咸通中及笄，為李億補闕侍寵。夫人妒，不能容，億遣隷咸宜觀披戴。（筆者訳「咸通年間十五歳に李億の側室になり、かわいがられた。その後嫉妬した李の正妻は、二人の関係を許そうとはせず、李億は結局魚玄機を咸宜観に託した。」）

咸通中，為李億補闕執箕帚。後愛衰下山，隷咸宜觀為女道士。（筆者訳「咸通年間李億の側室になり、愛情がなくなった後、咸宜観で道士になる。」）

魚玄機は、十五歳の頃に李億の妾となった。二人が会ったのは、李億が科挙の試験に合格した時期であったと推測されている。(10)その頃、李億はすでに結婚していたが、二人は深く愛し合うようになる。(11)家柄を重視する唐の時代、娼家出身の魚玄機は高い地位にあった李億と正式に結婚することができず、側室になるほかなかった。当時にあって夫との関係は主従関係に近いものであり、同居は許されず、李億は魚玄機を別院に移すことになった。

ところで、『全唐詩』には、約五〇首の魚玄機の詩歌が収録されている。その中の七首は李億に送ったものである。(12)二人が具体的にどんな関係であったかは、これらの詩歌を解釈していくことで知ることができる。別院での生活を始める魚玄機は『酬李學士寄簟』(13)という詩歌を李億に贈っている。内容は以下の通りである。

珍簟新鋪翡翠樓。泓澄玉水記方流。唯應雲扇情相似。同向銀牀恨早秋。

（筆者訳「ござをもらってとても大切にし、待ちきれずにすぐ床に敷いた。ござは澄んで揺れる緑の波みたいだ。しかし李億の私への思いは班婕妤の扇子のように、秋が来たら何の用もなくなってしまい、捨てられ

るのだろう」）

魚玄機は別院で毎日、李億が訪れるのを待っていた。この詩歌には、李億からの贈り物を得て幸福を感じた魚玄機が、その直後悲しい気持ちになってしまった様子が語られている。「云扇情」という言葉は漢の班婕妤『怨歌行』に由来する。秋になると扇子は捨てられるという比喩は、いつか自分も捨てられるという女性の不安をたとえている。「珍簟」、つまりござは魚玄機に班婕妤の扇子を連想させ、自分はござのようにやがて李億に捨てられるではないかという心配に捉われてしまっている様子が、この詩歌には歌われている。[14] また、『全唐詩』に収録されている『春情寄子安』『隔漢江寄子安』『江陵愁望寄子安』などの魚玄機の詩歌には、李億に寄せる深い愛情、李億の気持が自分から離れていくさびしさや悲しみが記されている。

しかし興味深いのは、魚玄機と李億の交際を描くにあたって、鷗外がこれらの詩歌を引用していないことである。作品化にあたって鷗外は詩歌に伝わる玄機の愛情や悲しみすべてを作品から放逐してしまっている。その代わりに、小説では次のように、魚玄機の李に対する拒絶の意志が描かれている。

此時李は遽に發した願が愜つたやうに思つた。しかしそこに意外の障礙が生じた。それは李が身を以て、近かうとすれば、玄機は回避して、強ひて逼れば號泣するのである。林亭は李が夕に望を懐いて往き、朝に興を失って還るの處となつた。

ここには男女の関係を拒絶しようとする魚玄機の姿が記されている。小説に描かれた魚玄機は李に対して恋愛感情を抱いていたわけではなく、彼の詩人としての才能を尊敬していただけだった。鷗外は、魚玄機の李億に対する気持ちを「蔓草が木の幹に纏ひ附かうとするやうな心」と形容している。蔓草が木の幹を巻きついて養分を吸収するように、魚玄機は李を通じて詩歌の技法を手に入れようとしていたと言うのだ。鷗外は魚玄機の李億に寄せる愛情を一切描かないままに、李億を詩人として尊敬する魚玄機の姿のみを描いている。

また、鷗外は、魚玄機が李億と出会う前、崇真観で遊んだ思い出を描いた場面で、魚玄機の詩歌『遊崇真観南楼 覩新及第題名処』[15]を作品に引用している。

雲峰滿目放春情。歴歴銀鉤指下生。自恨羅衣掩詩句。舉頭空羨榜中名。（筆者訳「崇真観南楼の前に、見渡す限り山の峰が起伏し、春の日に晴れる。進士たちは力強い文字を書いている。自分は女性のことで詩文の才能を発揮できないことを恨み、壁に載せる進士たちの名前をうらやむことしかできない」）

唐の進士（科挙試験に合格した人）は崇真観南楼の壁に自分の名を揮毫する習慣があった。この詩歌は大中一二年、進士が崇真観南楼で名を揮毫するのを魚玄機が見た時に創作したものである。ここには、詩家としての才能に恵まれながらも、女性であるがゆえにその才を発揮することが許されない現在の状況に悲憤する魚玄機が描かれている。鷗

外はあくまで自己の意志を実現していくことで人生の意義を獲得しようとする女性として、魚玄機を描こうとしている。

## 三　陳との交際

史料に伝わるところによれば、魚玄機と李億の婚姻関係は長く続くことはなかった。魚玄機が一六歳の頃、李億の彼女への愛情がなくなり、魚玄機は、家から追い出されて女道士になる。[16]

次に李億と別れた後の魚玄機について、史料と比較しつつ、検証していく。道観で知己を得た女道士、采蘋が失踪した後、魚玄機が淋しさの中で友人を求めはじめる様子が作品には「客と共に謔浪した玄機は、客の散じた後に、怏々として、樂まない。夜が更けても眠らずに、目に涙を湛へてゐる」と描かれている。このあたりから、鷗外が描く魚玄機は、徐々に史料に伝わる魚玄機像に接近しはじめていることが確認できる。鷗外は前半の物語で玄機の男性的で「沈重」な面だけを形象し、物語が展開するにつれて史伝に寄り添う形で感傷的な彼女の姿を描きはじめている。だからこそ、入道後の魚玄機の様子を伝える場面で、鷗外は玄機が友人温庭筠に寄せた『寄飛卿』[17]を引用紹介するのである。

階砌亂蛩鳴。庭柯煙露清。月中鄰樂響。樓上遠山明。珍簟涼風著。瑤琴寄恨生。嵇君懶書劄。底物慰秋情。（筆者訳「階段の上にコオロギはやかましく鳴いている。庭の木をただよう霧は静かに澄んでいる。隣の家から聞こえる笙の歌は月から伝わったようだ。屋根裏で遠山を眺めると、はっきりとその姿が見える。私が大切にするござを涼風が撫で、琴弦を弾む音には惜しさが込められている。飛卿は手紙も送ってくれない。いったい何が秋の思い出を慰めることができるのか」）

この詩歌には、秋の日に魚玄機が、隣家の音楽や遠い風景に託した、さびしさが表現されている。魚玄機はたくさんの客人と出会い、詩歌を通じて交流しているが、温のような、師にも友人にもなることができる存在を見つけることができなった、そのような孤独感をここで魚玄機は詩歌にしている。

『寄飛卿』に「嵇君懶書劄。底物慰秋情」と記されているように、温からの手紙が届かない魚玄機はさびしさを抱かざるをえなかった。これを逆から言えば、魚玄機は温との交流を通じて精神的に救済されていたことになる。しかし、鷗外の『魚玄機』には、温庭筠とのやりとりによってもさびしさをまぎらすことができなかった魚玄機の様子も描かれており、ここが史料とは異なる。「さて日を経て温の書が來ると、玄機は失望したやうに見えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである」という文章からわかるのは、詩人としての人生を手に入れても、魚玄機が自分の人生に満足できなかったこと、その空白を埋めるために恋愛に傾斜していったことである。

そして鷗外は物語の展開の上で重要な役割を担う陳某という人物を

登場させることになる。

或る夜玄機は例の如く、燈の下に眉を蹙めて沈思してゐたが、漸く不安になつて席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取つては、又直すぐに放下しなどしてゐた。良久しうして後、玄機は紙を展べて詩歌を書いた。それは樂人陳某に寄せる詩歌であつた。

ここで鷗外は、楽人陳某という、どの史伝にも記されていない人物を登場させ、『感懐寄人』[18]という実在する魚玄機の詩歌を、彼女が陳へ贈ったものとして引用している。陳は実在しないのだから、このエピソードはもちろん鷗外の創作であることになる。魚玄機が陳へ贈った『感懐寄人』は次のようなものである。

恨寄朱絃上。含情意不任。早知雲雨会。未起蕙蘭心。灼灼桃兼李。無妨國士尋。蒼蒼松與桂。仍羨世人欽。月色苔階浄。歌聲竹院深。門前紅葉地。不掃待知音。（筆者訳「別れの恨みを琴線に託したが、琴の音も私の気持ちを語ることができない。もし出会った後にまた別れる雲雨のような縁だと早く知れれば、純粋な少女の心の中でさざ波立つことはない。今咲き誇る花は素敵な人が訪れるのを待っている。うっそうと生い茂っている松や木犀は人に愛されるのを羨んでいる。月明かりの下で庭の階段は美しい。竹を植えた庭の奥から歌声が聞こえ、さらに静かなさびしさをかみしめる。門の前には紅葉が落ちている。友がいつか訪れると思うから、門の前の紅葉をそのままにしておこう」）

鷗外は、この詩歌に託す形で、陳に詩歌を送ることで孤独から救済されようとする魚玄機の内面を表現している。孤独感の中で一人の男性に恋愛感情を抱き、その思いを込めた詩歌を送ることで、男女の関係へと発展していくというプロットは、物語の展開としてきわめて自然であり、ここで引用される『感懐寄人』は、物語を進行させる上で重要な役割を果たしている。

さらに陳との交際がはじまった後の魚玄機を見ていく。二人の行き来が頻繁になるにつれて、魚玄機の人柄や行動は、変化を見せはじめる。

陳の玄機を訪ふことが頻なので、客は多く卻けられるやうになつた。書を索めるものは、只金を贈って書を得るだけで、満足しなくてはならぬことになつたのである。

陳に思いを寄せる魚玄機は、詩人として生きることに人生の意義を認めていた頃の彼女とはまったく異なる姿を見せはじめている。もはや彼女にとって詩歌は、陳がそばにいないさびしさをまぎらわせる手段にすぎなくなっている。

魚玄機と陳の往来はひそかに七年間続き、彼女の生活は陳との恋愛を中心に回りはじめることになった。そして鷗外はここで、史伝には

記されていないエピソードを付け加える。それは、召使いを解雇し、「醜悪」で「不機嫌な」老婢を使うことにしたという挿話である。魚玄機が召使いを解雇した後、温に詩歌を送る場面で鷗外は、彼女の『冬夜寄温飛卿』[19]を引用している。

苦思搜詩燈下吟。不眠長夜怕寒衾。滿庭木葉愁風起。透幌紗窗惜月沈。疏散未閑終遂願。盛衰空見本來心。幽棲莫定梧桐處。暮雀啾啾空繞林。（筆者訳「蝋燭の光の下で心の痛みを抱きながら詩歌を読む。眠れない夜に、私は寒さと孤独を我慢するしかない。庭に落ちたたくさん葉は悲しみに吹かれている。窓越しに見る月はもう沈んでしまった。さまざまな感情が私の心の中で、浮かんでは消えていったが、結局願いが叶えられることはなかった。こんな人里離れた場所に住んでいる私は愛されることもなくなった。日暮れの中で雀は森の中ではかなく鳴いている」）

九内悠水子は、魚玄機の「詩作に対する態度の変化は精神が肉体に凌駕されてゆく過程」であり、「陳と出会いによって玄機の肉体は完全に精神と分離してしまう」と述べている。[20]鷗外は、この詩歌を作品に引用紹介することで、強い意志を持っていたはずの魚玄機が、愛情に悩み、孤独に苦しむ女性へと変貌していったことを表現している。陳と恋に落ちたことで彼女の生の中心は詩歌から恋愛に移ってしまった。そして魚玄機は普通の女として、陳との関係の中に安定した人生を求めるようになる。しかし、陳は時間が経つにつれて、彼女に対してかつてのような愛情を感じなくなっていった。魚玄機の愛は挫折し、結局、史伝に伝えられる魚玄機と同じように、嫉妬に狂い、陳と婢の緑翹の関係を疑い、彼女を殺してしまうことになる。

史伝に語られる魚玄機は、男性のような野心を持ち、科挙試験の制度に不満を言うなど、社会と対峙する自我を持つ女性であった。そのもう一方で、李億に対して愛情を抱き、その別れを悲しんでいた。彼女の内部では、詩家として生きようとする強い意志をもった魚玄機と、恋愛に溺れる魚玄機が同居、あるいは混在している。

一方、鷗外の場合このような彼女の多面性を時系列上に整理し、魚玄機の「変化」として描いている。前半で鷗外は、玄機の意志的な側面だけを描く一方、後半では陳を愛するあまり、緑翹を殺してしまう「物語」を語っている。鷗外は史料や詩歌を参照して玄機を形象したが、同時に魚玄機の変貌の物語になるようプロットを構成しており、前半と後半では、魚玄機における異なる二つの性格を形象しているわけである。

## 四　緑翹殺人をめぐる改作

さらに、魚玄機による緑翹殺害について考察していく。

『三水小牘』[21]には緑翹について「一女僮曰緑翹。亦特明慧有色。」（筆者訳「魚玄機は緑翹という婢がいた。頭が良くて綺麗である」）と説明されている。緑翹は、魚玄機ほどの美女ではないが、きれいな顔立ちを

した利発な女性であり、けっして醜い女性ではなかった。

一方、鷗外の『魚玄機』では、緑翹について「顔は美しくはないが、聰慧で媚態があつた」「緑翹は額の低い、頤の短い猾子に似た顔で、手足は粗大である。領や肘はいつも垢膩に汚れてゐる」と記されている。鷗外が描く緑翹は、魚玄機と比べると、気品がなく、だらしない女性であったが、「媚態があった」という。楽人陳某と恋愛関係を結んで以来、玄機が恋愛に溺れ、嫉妬に狂う女性に変貌してしまったことを強調するために、鷗外はあえて緑翹を美しくない女性として設定したと考えられる。

また、殺人事件が起こる当日の状況について『三水小牘』[22]には次のように記載されている。

忽一日。機為鄰院所邀。將行。誡翹曰。無出。若有熟客。但云在某處。機為女所留，迨暮方歸院，綠翹迎門曰。適某客來。知鍊師不在。不舍轡而去矣。客乃機素相暱者。意翹與之私。及夜。張燈扃戸。乃命翹入臥內詢之。（筆者訳「ある日、玄機は隣の院に誘われた。出発前に緑翹に「外出してはいけません。知り合いの客が来たら、私の場所を教えてあげなさい」と言った。玄機は女道士に引きとめられ、日暮れになってやっと戻った。緑翹は出迎えて「さっきお客さんが来た。不在を知ると、馬から降りずに帰って行った」と言った。その客は平日頃玄機と親しんでいる人だから、玄機は緑翹と客が密通していることを疑っていた。その日の夜に明りを灯して扉を閉めた後、緑翹を部屋の中に呼んで詰問した。）

魚玄機は隣の女道士に誘われ外出し、日暮れに咸宜観に帰ってきた。魚玄機が戻ってきた時、緑翹が客人が尋ねてきたことを伝えると、玄機は二人が密通しているのではないかと疑いはじめる。以上が史伝に伝わる魚玄機が緑翹を殺害する理由である。

『全唐詩』には、玄機が李億や温庭筠以外の男性らに送る詩歌も残っており、魚玄機が多数の男性と交際していたと考えられている。[23]史料に登場する「客」は玄機が交際していた男性の一人である。魚玄機の詩歌を読んでいる鷗外が、この事実に気づかないはずはない。しかし、鷗外の『魚玄機』の場合は楽人陳某のみを登場させており、史料に名前が記されていない多くの「客」は姿を消してしまっている。

鷗外が描く魚玄機の恋人、陳は、交際が始まった当初、頻繁に魚玄機を訪ねていたが、やがて足も遠のき、彼女を置き去りにして、旅行に出かけるようになっていった。そして、いつもなら書斎で魚玄機を待っているはずの陳が、その日に限って、彼女が帰ってくるのを待たずに帰ってしまった。つまり、魚玄機との恋愛関係にあった七年の間に陳の彼女に対する態度や行動が、大きく変わってしまったわけである。鷗外は、魚玄機の目を通じて、陳と緑翹の接触について次のように記している。

其間に玄機は、度々陳が緑翹を揶揄するのを見た。（中略）そのうち三人の關係が少しく紛糾して来た。これまでは玄機の擧措が

意に満たぬ時、陳は寡言になつたり、又は全く口を噤んでゐたりしたのに、今は陳がさう云ふ時、多く緑翹と語つた。其の上さう云ふ時の陳の詞は極て溫和である。

鷗外は陳の行動や変化を詳しく描写することで、魚玄機が緑翹を殺した理由が嫉妬であったことを物語の中に明確に組み込んでいる。嫉妬する魚玄機の目には陳と緑翹が密通しているように見えたわけだが、さらに鷗外は、その原因は陳の心がはなれたところにあり、陳の密通を魚玄機が妄想したのは、一途な愛を陳に寄せていたからである、と時間軸上において可能なかぎり遡行して原因を記している。この点も史伝とは異なる。

ところで、歴史上における魚玄機による緑翹殺害に関して、史料の中でももっとも重要視されているのが、以下のような緑翹の言葉[24]である。

翹曰。自執巾盥數年。實自檢御，不令有似是之過。致忤尊意。且某客至款扉。翹隔闔報云。鍊師不在。客無言。策馬而去。若云情愛。不蓄於胸襟有年矣。幸鍊師無疑。機愈怒。裸而笞百數。但言無之。既委頓。請盃水酹地曰。鍊師欲求三清長生之道。而未能忘解佩薦枕之歡。反以沈猜。厚誣貞正。翹今必死於毒手矣。無天則無所訴。若有。誰能抑我彊魂。誓不蠢蠢於冥莫之中。縱爾淫佚。言訖。絶於地。（筆者訳「緑翹は「あなたに仕えて数年たつが、私は、自分の言行に十分に気をつけ慎んでいる。あなたの意に逆らうことはない。私はただ、扉を閉めたまま、客にあなたはいないと教えただけだ。客も何も話さずに馬に乗って離れた。もう何年もの間、男性を愛したことなどない。私のことを疑わないでください」と言った。玄機はこの話を聞きさらに怒り始めた。緑翹に服を脱ぐように命じて、竹の板で厳しく打った。何百回打っても緑翹はまだ否定している。緑翹はもう立ち上がることができなくなった。そして緑翹は水を求め、天に祈りを捧げるために地面に撒いた。「魚玄機は道家三清の不老長生の道を求めているが、男女の情愛を忘れることができてなかった。今、他人を疑う心にとらわれてしまい、私にぬれぎぬを着せている。今日私はきっとあなたの手で死ぬだろう。天は存在せず、だから私はどこにも私も無罪を訴えることができない。かならずや私の怨念はあなたを呪い続けるだろう。私は死者の国にあってもあなたを許すことなどはできない」と言った後、緑翹は死んでしまった。」）

このように史伝に記された緑翹は婢の身分であるにもかかわらず、きわめて理路整然と自分の潔白を説明している。一方、魚玄機は緑翹の筋道の立った弁解を無視し、拷問にかけようとする。伊藤発子が述べているように、『三水小牘』は「実録的教訓的」であり、魚玄機が男女の愛情に溺れることを批判し、疑心に心を奪われ、罪を犯せばかならず報いがあることを伝えようとしている。[25] 一方、鷗外は、以上のような緑翹の遺言を参照せず、玄機の心理や殺人過程に焦点を当てて描写している。たとえば、次の文章がそれに当たる。

女は只「存じません、存じません」と云つた。玄機にはそれが甚しく狡獪なやうに感ぜられた。玄機は床の上に跪いてゐる女を押し倒した。女は懾れて目を睜つてゐる。「なぜ白状しないか」と叫んで玄機は女の吭を扼した。女は只手足をもがいてゐる。玄機が手を放して見ると、女は死んでゐた。

『三水小牘』における緑翹殺害の場面は、魚玄機よりも緑翹を中心に描いているのだが、鷗外の場合、緑翹に関する記述をほとんど削除してしまっている。結果、作品では史料に記されたような教訓めいた内容が一切姿を消してしまっている。ここから浮かび上がるのは、緑翹の遺言を引用することで道義的に魚玄機を批判することを回避しようとした鷗外の意図である。もし鷗外が魚玄機を道徳的に批判するつもりなら、『三水小牘』の伝えるエピソードを作品世界に取り込んだはずである。

## 五　魚玄機の二面性―『蛇』との比較研究

ここまでの分析からわかるように、鷗外は当初、魚玄機を美貌と才能を兼ね備え、主体性を持って自分の生の意義や価値を自ら発見し、実現していこうとする女性として描いていた。しかし、物語の後半になると、その対極にあるような人間性が表面化しはじめている。後半に描かれた彼女は愛欲に溺れ、嫉妬のあまり、女婢緑翹を殺してしまう。しかも鷗外は、そのような魚玄機を、史伝のように道義的に批判することを回避している。

このような魚玄機の造形は鷗外の中期作品『蛇』に登場するお豊の人物像と近似している。そこで最後に魚玄機とお豊、ふたりの女性の人物像を比較しつつ、玄機が変貌していった理由について分析を進めていきたい。

明治四四(一九一〇)年に『中央公論』に発表された『蛇』の主人公のお豊について、作品では「身代は穂積家より小さくても、同郡で舊家として知られてゐる家の娘に、これも東京に出て、高等女學校を卒業して帰つてゐるのがあつた。いつか越後の人が此娘を見て、自分の國は女の美しい國だが、お豊さんのように美しいのは、見たことがないと云つたそうである」と記されている。お豊も魚玄機と同じく美貌の持主で、知性豊かな女性として描かれていることがわかる。魚玄機は小さい頃から詩歌を学び、男性以上の知性の持ち主であったわけだが、『蛇』のお豊も、女学校を卒業し、新しい教育を受けた女性として形象されている。

また、『蛇』にはお豊について次のようなエピソードも記されている。

御隠居が樂しげに主人に話し掛ける。主人が返事をする。嫁さんは下を向いて聞いてゐたが、ろくに物も食べずに、誰よりも先に默つて席を立つてしまった。(中略)併し午も晩も同じやうに、嫁さん丈早く席を起つた。その次の日からは、用事にかこつけて、嫁さんは遅れて食べに出る。

お豊の嫁ぎ先、穂積千足の家には、食事の時に「何か近郷であつた嘉言善行といふやうな事を話す」習慣があった。また、「新聞紙の三面記事」、前日読んだ本、聞いた話などを話し合うことは、先代の主人からの習わしであった。しかし、このような穂積家の習慣に対してお豊は、きわめて懐疑的であった。彼女は「お母あ様の偽善的なお話が嫌いで」、わざと家族との食事の時間を避けるようになっていった。お豊は新しい学問を受けることで、「オオソリチイ」を認めなくなっていたのである。魚玄機もまたお豊と同じく理知的な女性として描かれており、才能や野心を持ちつつも、女性ゆえに学問をもって身を立てることのできない不条理に不満をいだいている。

しかし、お豊は義母が亡くなった初七日の夜に、仏壇に「とぐろを巻いて」いる大きな蛇を見、この蛇は死んだ義母が自分に罰を与えるための怨霊だと信じ、「気が狂ってしまう」。高等教育を受けた「新しい女性」であったはずのお豊は、蛇の祟りを恐れて理性を喪失し、狂気の世界へ転落していった。このエピソードは、彼女の精神が理性と狂気(非理性)を極点とする幅あるいは、ゆれとして、あるいは二重存在としてあったことを私たちに予感させる。ミシェル・フーコーによれば、近代以前においては狂気と非狂気、理性と非理性が区別されることなく、雑然と入り組んでいた。「近代社会の形成期」において、「近代の政治的、社会的、経済的、思想的な枠組みが準備され」、「〈理性〉の名のもとに、狂気が非理性として排除されて」いったという。[26] これを踏まえれば、お豊の表面的な人格として現れる合理的で近代的な自我の外部には、欲望や狂気など、生成変化する様々な情念や欲望が無辺に広がっていたことになる。だからこそ、蛇を見たことをきっかけにお豊は狂気に取り憑かれたのではないか。フーコーの考え方を踏まえるならば、人間存在は可視領域と不可視領域を合わせて全体性としてあることになる。とするなら、仏壇でとぐろを巻く蛇を目撃したことをきっかけとして、お豊の表層的な人格に裂け目が生じ、不可視領域に押し込められていた狂気が噴出しはじめた、と考えることができる。

一方、『魚玄機』の場合、楽人陳某と出会って以後、理知であったはずの魚玄機は、徐々に欲望や官能的人生に身を委ねるようになる。そして、緑翹に対する猜疑心や嫉妬心を抱くようになり、ついには殺害に到る。お豊と魚玄機、逸脱の形式は異なるが、理性、理知の喪失と狂気への転落という点では同じである。言い換えれば、人格の内に理性と非理性の両方を抱える存在として描かれている点で両者は一致している。ここから浮かび上がってくるのは、人間存在そのものが理性と非理性の総体として形成されているとする鷗外の実存をめぐる認識論的布置である。詩歌の才能に恵まれ、芸術家として生の価値を構築してきた魚玄機はやがて、男女関係におぼれ、妄想にとらわれ、緑翹を殺してしまう。鷗外は理性と狂気どちらか一方のみを人間の本質とするのではなく、これら二極を内包する全体性として人間の実存様式を理解しようとしている。

人はどうあるべきかではなく、人はいかにあるのかという鷗外の問いかけが魚玄機の作品世界の基層には存在している。人は理性と非理性の総体としてあり、深層に潜む狂気が何かをきっかけとして可視領

域に噴出しはじめることもある。これがこの作品で鷗外が描いた存在の実相なのである。

**注**

（1）山本美智子「森鷗外『魚玄機』の史料とテーマについて」（『日本文学』昭和四八年（一九七三）一一月）によれば、鷗外が挙げた参考文献は、魚玄機の生涯を詳細に記録する『三水小牘』系統（『太平廣記（緑翹）』『続談助』）、『全唐詩話』系統（『唐詩紀事』）、『北夢瑣言』系統（『太平廣記（魚玄機）』）、『唐才子傳』系統四種類と、概略的に記述する『南部新書』系統、『全唐詩』系統、全六系統に分類することができる。

（2）神鷹徳治「本を楽しむ　鷗外と漢籍：『魚玄機』をめぐって」（『書物学』平成二六年（二〇一四）八月）によれば、『唐女郎魚玄機詩』はおそらく明治三七（一九〇四）年に佐佐木信綱から贈られたものであり、鷗外はその本に収録された魚玄機の詩歌や「魚玄机事略」を読んで、魚玄機という女性に興味を持つのではないか、と指摘している。

（3）皇甫枚撰・中華書局上海編輯所編輯編『三水小牘』中華書局　一九五八年八月

（4）孫光憲撰・賈二強點校『北夢瑣言』中華書局　二〇〇二年六月

（5）布目潮渢・中村喬『唐才子傳之研究』アジア史研究會　昭和四七年（一九七二）八月

（6）陈东原『中国妇女生活史』（商务印书馆　二〇一五年七月）によれば、『北里志・孙棨序』には、「其中诸妓，多能谈吐，颇有知书言话者」（筆者訳：「唐の官妓の多くは、文化的素養を持ち、上品な話し方をしている」）と記されている。娼妓が歌や踊りの技だけではなく、上品な言葉遣いと文化的素養を求められるのが一般的であった。とくに、詩の才能を持っている女性は、文人らに好まれていた。

（7）竹盛天雄「『魚玄機』をめぐって―歴史小説の一面」『日本近代文学』昭和四五年（一九七〇）一〇月）作品では、玄機の「学びたい」という意志が、両親の功利主義に先行するものとして描かれている。

（8）（4）と同じ

（9）（5）と同じ

（10）江合友「唐代女冠诗人的婚姻境遇及其人生选择―以李冶、鱼玄机和薛涛为中心」（『宝鸡文理学院学报（社会科学版）』二〇〇六年一月）によれば、李億は、大中十二（八五八）年に、科挙試験で状元に合格し、のちに「補闕」という官職に務める。

（11）江民繁・王瑞芳编著『中國歷代才女小傳』浙江文艺出版社　一九八四年六月

（12）李億に送る詩歌は、『贈鄰女（一作寄李億員外）』『酬李學士寄簟』『情書（一作書情）寄李子安』『春情寄子安』『隔漢江寄子安』『江陵愁望寄子安』『寄子安』、七首が現存されている。

（13）中華書局編輯部点校『全唐詩』第二十三册「魚玄機」条　中華書局一九六〇年四月

（14）王海泉『晚唐女诗人鱼玄机诗歌中的女性意识』『中国集体经济』二〇一一年二月

（15）（13）と同じ

（16）歴史上の玄機が女道士になる契機について、皇甫枚『三水小牘』には、「破瓜之歳。志慕清虚。咸通初。遂從冠帔於咸宜。」（筆者訳「十六歳の時世俗とは無縁な生活に憧れ、咸通初年、咸宜観に入り、女道士になる。」）と説明されている。李億に対して深い愛情を抱えつつも、不平等な婚姻に翻弄された魚玄機は、女道士になる前にすでに道観に憧れていたことがわかる。また、『北夢瑣言』『唐才子伝』には、李億との愛情の終焉、あるいは、李億と結婚したものの、正妻によって家から追い出されたことが記される。一方、鷗外の『魚玄機』の場合、「李は屢催して曾て遂げぬ欲望の爲に、徒らに精神を銷磨して、行往座臥の間、恍惚として失する所あるが如くになつた」と、李は魚玄機の冷たい態度に接し、徐々に彼女に対する興味を失っていったと記されている。鷗外は二人の関係が破綻していく原因を、魚玄機の李億に対する愛情の欠如に起因するものとして描いている。

（17）（13）と同じ

(18) (13)と同じ
(19) (13)と同じ
(20) 九内悠水子「森鷗外『魚玄機』試論」『近代文学試論』 平成一三年(二〇〇一)一二月
(21) (3)と同じ
(22) (3)と同じ
(23) 梁超然「鱼玄机考略」『西北大学学报(哲学社会科学版)』 一九九七年三月
(24) (3)と同じ
(25) 伊藤発子「鷗外歴史小説と中国文学:『魚玄機』と唐代伝奇との関連において」『中村学園研究紀要』 昭和五五年(一九八〇)一二月
(26) ミシェル・フーコー・田村俶訳『狂気の歴史:古典主義時代における』新潮社 令和二年(二〇二〇)七月